



## ■第6回 都草講演会 「登り窯」は語る



11月18日、令和2年度の京都学・歴彩館府民協働連続講座として、第6回都草講演会が行われました。

テーマは「登り窯」は語る。たくさんの人手を必要とする「登り窯」は単なるヤキモノを焼く装置ではなく、コミュニティーをはぐくむ大切な場所として、地域の人々を繋いできました。

清水焼の伝統産地である五条坂には数々の困難を受けつつも、奇跡的に5基（他1基は一部のみ）が残っていました。しかしここ数年の世界的なインバウンドによる周辺地域の急激な開発の結果、2基が人知れず姿を消すことになりました。そこでこの地域の大切な文化遺産をもう一度見つめ直すきっかけになってもらえればと、この講演会を企画しました。



講演は、立命館大学の木立雅朗教授。窯業考古学が専門の木立先生から「京式登り窯の歴史と現在 -京都のやきものをはぐくんだ遺構を伝える-」と題して、登り窯のお話や京都のやきものの歴史など、最初に基礎となる知識をわかりやすくお話していただきました。今回のテーマとなる登り窯ですが、現存

する3基のうち、京都市の所有する1基は「京式登り窯」と呼ばれ、五条坂にあるにもかかわらず、明治時代に粟田焼を生産していた会社が造った巨大な登り窯であることがわかっています。

後半の対談では、猪飼祐一氏(喜兵衛窯)と安田浩人氏(粟田焼窯元)の2人の陶芸家も交え、この特異な登り窯との縁を語っていただきました。京都新聞社の取材も入り、すばらしい講演会だったのではないかと感じています。(副理事長 松枝 しげ美)

## ■第14回 京都通模擬試験、解答解説はYouTubeで



収録中の伊藤 一彦会員

京都検定対策委員会では、合格を目指すみなさまの勉強に少しでもお役に立てればという思いで、今年も3月から当委員会のメンバーで問題作りに取り組みました。23人のメンバーには東京、大阪、滋賀など遠方の会員も多いことから、毎月リモート会議で、試験問題について検討しました。

模擬試験は昨年まではひと・まち交流館で開催し、試験終了後に解答解説を行っていました。すでに試験会場を確保していましたが、新型コロナの影響を踏まえた実施方法について何回も話し合いました。やはり長時間多くの受験者が集まる会場での模擬試験と解答解説を実施することは感染の危険があると、

断念せざるを得ない状況でした。それでも半年をかけて作り上げた問題と解答解説を受験者にお届けしたいとの意見もあり、今回は新しい方法に取り組みました。

10月13日に、「めざせ、京都検定1級！！ 第14回 京都通模擬試験」の問題を受験者に郵送。採点希望者には解答を返送していただき添削して送り返しました。そして解答解説を5つのテーマに分けて担当者ごとに収録し、YouTubeで受験者に公開し見ていただきました。

今年もこれまでの本試験の出題傾向を分析しながら、問題の難易度、出題のバランスなどを考えて作成した模擬試験を受けていただくことができよかったですと思います。会場でお会いすることはできませんでしたが、受験されたみなさまにお礼を申し上げます。(理事 岸本 幸子)

## ■ 11月から御苑・御所案内を再開



新型コロナウイルスの影響で3月よりお休みしていた京都御苑・御所案内を、11月1日から再開いたしました。8カ月ぶり、満を持しての再スタートです。久しぶりのお客様にガイドのテンションも上がり気味ですが、抑えて抑えて安全に十分注意して、マスクを付け、ソーシャルディスタンスを取りながらご案内しました。

初日は快晴で風もなく、秋の風情を満喫できるガイド日和。都草のホームページや京都新聞の案内を見て来られたお客様は、御所コース3名、御苑コース6名の計9名。御所コース

では足の悪い方が1人おられたので、ガイド1名を専属にしてご案内しました。

御苑・御所は季節ごとに表情を変え、ガイドはいち早く察知し案内します。九条池の高倉橋のそばにはハゼの木があり、実は和ロウソクのロウの材料として使われます。盛りになるとハゼ紅葉と言ひ、真っ赤に色付きます。堺町休憩所の前に大きなもみじがあります。青葉から黄色、オレンジ、真っ赤まで美しいグラデーションを楽しむことができます。秋の進み具合が一目でわかる、私の指標です。

歴史の話の間に目に飛び込む美しい自然をご案内するのも我々ガイドの仕事です。

参内するときの縁起を担いでひんぷくひんぷく(貧福)と唱えながら歩く公家の習慣や生活の様子、それを一目見ようとにぎわった桧垣茶屋の話など、都草らしい案内がしたいと思います。

まだまだお伝えしたいことはたくさんあります。これからも乞うご期待。(専務理事 田村 光弘)



## ■ 建仁寺塔頭両足院の受付・ガイドを担当



公益財団法人京都古文化保存協会の依頼を受けて、京都非公開文化財特別公開対象の一つ両足院の受付・ガイドを都草が担当することとなりました。

期間は10月25日から12月13日までの49日間の長丁場、会員48名、延べ196名が参加する、都草としても初めての取り組みです。スタート当初は、少しバタバタとして担当会員にご苦勞をお掛けしましたが、現在は順調に推移しています。

両足院は、龍山徳見禅師を開山とする臨済宗建仁寺派の塔頭で、半夏生の庭で有名な寺院です。今回の公開では、伊藤若冲筆「雪梅雄鶏図」、長谷川等伯筆「水辺童子図襖」が展示されており、半夏生は色づいてはいませんが、ドウダンツツジが色鮮やかで見ごたえのあるお庭はお薦めです。

コロナ禍で、長い解説はしていませんが、都草会員の個性溢れる話も楽しいものです。担当会員一同頑張っ

て活動しておりますので、ぜひとも期間中に一度覗いてください。(拝観料1000円)(理事 豊田 博一)